

令和6年度 能美市立和気小学校 学校経営具現化に向けた学校評価表（前期）

項目	具体的方策	主担当	【評価指標】 〈成果指標〉 〈努力指標〉 〈満足度指標〉	【評価の根拠】 達成度判断基準	評価	前期評価からの 分析と考察	今後の改善策	学校運営協議会での 懇談内容
1	【ロードマップの活用】 学校力向上ロードマップを活用し、組織的・計画的に運用する。	永吉	【努力指標】 自分の担当分掌について、毎月ロードマップを検証することで、取組の見直しが行われている。	【教師アンケート】 「自分の担当分掌について、毎月ロードマップを検証し、適切な取組となるよう見直しを行った」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 A 92.9%	・昨年度の同時期が85.7%であったため、ロードマップの活用については概ね取り組むことができた。 ・毎月の三部会（定例）の際には、各部の主任にロードマップを配り、各部で取り組みの進捗状況を確認してもらったことは効果的だった。	・ロードマップ自体は年度当初に策定したものであり、取り組み中に一部見直しが図られた箇所もあったため、その都度更新して、次年度のロードマップに繋げていきたい。	特になし
			【業務改善】 多忙化改善に向けた取組や意識改革を推進すると共に協力・協働による有効な（効率的な）業務遂行を図る。	【教師アンケート】 「学校運営において、業務の平準化やワークライフバランスを意識し、業務改善に努めた」と回答する教師の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 A 92.9%	・概ねほとんどの教師が見通しをもって、計画的に業務を遂行することができている。分掌内での分担、協力・協働が実現できている。		
2	【授業改善】 児童主体の授業をつくる。	稲井	①課題に対して学習形態や学び方等を選択させるなど、児童が自力解決できるための手立てをとる。 ②よりよい解決策を探ったり、発展問題に挑戦したりできるように児童が思考し続けるための手立てをとる。	【教師】 ①「児童が自力解決できるための手立てをとっている」②「児童が思考し続けるための手立てをとっている」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【児童】 ①「算数の授業中、自分の力で問題を解くことができた」②「1時間(45分)の間、ねばり強く学び続けることができた(アンケートでは学び続ける具体の姿を明示)」と肯定的に回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 A 91.7% 【児童】 A 92.6%	教師アンケートの結果、自力解決できるための手立て、思考しつづけるための手立て共に9割でA評価となった。また、児童アンケートでも自分の力で解けた、粘り強く学び続けることができたと感じている割合が9割以上となりA評価だった。今年から取り組んできた、児童主体の学習になるよう教師側が意識し、子どもたちが自分の力で問題を解き、粘り強く考えることができたという意識につながった。	高学年の「算数の授業で授業が終わるまで頑張り続けることができた」の割合が他の項目に比べAの割合が低かった。2学期は学び方のパーツの獲得に取り組み、重点②の「思考し続けるための手立て」の幅が増やせるようにする。	「AIドリルの学習効果について」AIドリルは漢字の学習には使いにくい面もあるため、漢字の学習には従来の漢字ドリルを使って指導していく。算数、理科、社会などの教科では練習問題としてのAIドリルが効果的であるため、今後は紙媒体と端末双方の良さを生かして学習していけるとよい。
	【NEXT GIGAの推進】 ねらい達成のためにICTを効果的に活用した授業構想を立て、実践を進める。		稲井・竹内	ICTをねらい達成に向けて子どもが主体的に端末を活用できる授業構想を立て、実践を進めるように努めている。	【教師】 「ねらい達成に向けてICTを使った授業を行っている」と肯定的に回答する教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 A 91.7%	教師アンケートでA評価となった。昨年と同じ時期のアンケート結果より、A+Bの割合があがった。これまでのICTの研修で、ねらい達成に向けてICTを活用することを意識して授業を構想できる日常になってきているように思う。	アンケートでは「ややあてはまる」のBが50%だったもので、「あてはまる」のAになるようにICTサポーターを活用し夏休みにミニ校内研を開き、ICTの効果的な活用を進めていきたい。
	【学力の向上①】 AIドリルや常タイムを活用して基礎学力の定着、習熟を図る。	永吉	単元末テストの平均（知識及び技能）で（低学年）85点以上（高学年）80点以上達成した児童の割合が8割以上を目指す。	単元末テスト（知識及び技能）で低学年85点、高学年80点以上達成した児童の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	(国語) 73.8% (算数) 81.6% 【全体】 B 77.7%	(国語) 目標得点を達成した児童が80%を超えたのは1学年のみだった。文章を適切に読み取って解答することに大きな課題がある。 (算数) 多くの学年で80%を超える児童が目標得点を達成できた。授業と家庭学習の往還で、今後も基礎基本の定着に努めていく必要がある。	(国語) ・根拠となる叙述や言葉に印をつけて文章を読み取る ・全学年共通の読みとりワークに根気強く取り組む。 ・新単元に入る前に、教師が評価問題を確認し、授業の中で問題が解ける力をつける。 (算数) ・学校研究に沿った授業改善を進めていき、子どもに委ねた後は適用問題等で児童の見取りを確実にやっていく。	
【学力の向上②】 読書活動を充実させ、読書の質の向上を図る。	竹内	各学年のおすすめ10冊を1年間で読むことができる。	【各種教育データ】 「おすすめ10冊」のチェックカードを前期、後期に集め、検証する。（達成率） 前期…5冊以上 後期…10冊以上達成した児童の割合が、それぞれ A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	1年33% 2年57.6% 3年91.7% 4年61.5% 5年51.6% 6年75% 【全体】 C 61%	前年度に比べて学校全体で教師や委員会からの声掛けがあったため、借りている児童が多かったように思うが、割合としてはCDの学年が多い。6月の雨の日図書館の取り組み期間で天気が良く図書館に来る児童が少なかったことが原因の一つではないかと考えられる。	委員会や読み聞かせなどの常時的な取り組みでおすすめの本を絡める取り組みを多くする。図書室に来る機会を増やすような取り組み(週に1回学級で図書館を利用する、行事の取り組みなど)を行う。毎月どれくらい読んでいるかを確認し、学級に伝えていく。		

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	清川・深田	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。(児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など)	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「児童が主体的に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満 【児童アンケート】1～4年「児童会活動の取組に前向きにさんかできた。」5・6年「児童会活動を通して、何事にもねばり強くチャレンジし、楽しさを見つげられた。」と肯定的に回答する児童の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 A 90.9% 【児童】 A 92.3%	児童アンケート、特に児童会の中心となる5.6年生の回答が昨年度と比べてとても良かった。委員会の活動において、どの委員会でも児童に委ねたところが多かったからであろう。その成功体験が楽しさにつながっているようだ。	低・中学年の児童もチャレンジできた、楽しかったとより感じられるよう、さまざまな取り組みのあと振り返りの場を持つことを大事にする。また、今後も行事などさまざまな取り組みの際、児童が主体的に取り組めるように準備をしたり、声掛けしたりしていく。	「5、6年生のアンケート結果がよかった点について」 ・5、6年生のアンケート結果がよかったのはどのような取組の成果といえそうか。 ・今年度は子どもたちがやってみたいことをできるだけ実現できるように教師が支援していくことを大切にしている。例えば放送委員会では、子どもたちがしてみたいと言った「1年生インタビュー」の企画を子どもたち自身が工夫してやり遂げ実現させることができた。やってみたいことを実現させていくことで取組への意欲や充実感に繋がっていると思われる。
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫し、考えを聴き合い伝え合う授業づくりを行い、道徳的実践意欲を高める。	深田	【満足度指数】 児童の振り返りに、目指す姿に向けた変容が見られる。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「道徳的価値を自分ごととして考え深められるような手立てや工夫を行うことができた」とする教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【児童アンケート】「道徳の授業の中で自分ごととして考えることができた」と肯定的な回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【教師】 A 92.9% 【児童】 A 88.9%	児童アンケート・教師アンケートのどちらの結果もA評価となった。特に児童アンケートでは道徳的価値を自分のこととしてとらえて考えている児童が昨年度よりも約2ポイントアップであった。それは、授業において終末で、自分のこととして考える場を毎時間設定したり、声掛けしたりと教師の授業改善によるものかと思われる。だが、教職員の中で、あまりできなかったと回答した人もいる。	夏に道徳研修を行い、終末でのICTを使ったふりかえりの仕方を提案し、自分のこととして考える場の設定を取り組みやすくする。また、道徳での学習が自分の行動とつながっていることを自覚させる教職員からの声掛けも行事や人権の取り組みなどを通して増やしていく。	
		【校内支援体制の充実】 不登校等の未然防止のための校内支援体制や教育相談、児童理解の会を充実させ、専門組織との連携に努める。	清川・中野	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や各主任が連携・協働し、諸課題の早期解決・未然防止に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、校内支援会議を学期に2回設け、諸課題の早期解決・未然防止に努めている」と肯定的に回答した教師が、 A：90% B：80% C：70% D：70%以下	【教師】 A 100%	教員アンケートの結果からA評価となった。個別の支援計画をもつ児童を対象に支援会議を行い、その後の様子を月に一回開催する児童理解の会で共有することで、諸課題の早期解決・未然防止に務めたという評価につながったと考える。またSC活用として、来校時には必ずSCと打ち合わせて不登校児や行き渋りといった諸課題を抱える児童に対し、優先して心のケアを行えたことも評価につながった。	情報交換は学期に2回の支援会議では不十分であり、日ごろから職員間での情報共有を密に行い対処する必要がある。今後も教育相談担当や生徒指導主事が中心になり、学級担任だけでなく、養護教諭や支援員、SCをふくめ、スピーディーで多方面で情報交換を行っていく。	
4	健やかな身体の育成	【体力向上の工夫】 体力アップ1校1プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	北川	【成果指標】 3年生以上の4学年で「20mシャトルラン」の記録を5月に計測し、12月には5月の記録を2回以上のばす。	【各種教育データ】 【体力テストの結果】 3年生以上の4学年で「20mシャトルラン」の記録を5月に計測し、12月には5月の記録を2回以上のばすことができたのは、 4学年中、 A：4学年が達成 B：3学年が達成 C：2学年が達成 D：1学年が達成	実践中	R6体力テスト結果「20mシャトルラン」4年男子41.6 5年男子46.3 6年男子76.1 4年女子37.3 5年女子32.3 6年女子60.4(回) 県平均と比較すると、4年女子、6年男女は、上回っているが、4年男子と5年男女が下回っており、特に5年生の奮起が必要である。	運動会、持久走大会に向けての取組の中で持久力を伸ばせるように取り組む。	「メディア利用時間と良い睡眠について」 ・メディア利用時間と良い睡眠の相関関係を見ていくことで本校児童の傾向をつかみ、育友会の取組としていくのもよいのではないかと。
		【生活習慣の確立】 早寝早起きや「よいねむり」の習慣化により、基本的な生活習慣を確立することで、心身の健康の保持増進を図る。	北川・木戸口	【成果指標】 早寝早起きと睡眠の大切さについて児童・保護者に発信し、「よいねむり」ができていない児童の割合を80%以上にする。	【生活アンケート・保護者アンケート】 【生活アンケート】 「よいねむり」ができていない児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【保護者アンケート】 8時間以上の睡眠時間(低：9時間、高：8時間)を週に4日以上とることを心がけていると回答する保護者の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【児童】 49.8% D 【保護者】 87.2% B	3～6年児童対象の生活アンケートの結果、よいねむり(寝起きがよい・寝つきがよい・中途覚醒がない)ができていない児童は49.8%だった。メディア利用時間が2時間より長い児童が平日53%(うち4時間以上20%)、休日72%(うち8時間以上23%)と多いことも睡眠に影響していると考えられる。また、よいねむりの条件には心の状態も影響するため、メディアと心の健康に関する指導が必要である。	・夏休み最終週に、「生活習慣見直しシート」の取組を行うことでよいねむりのための行動を促し、2学期をスムーズにスタートさせられるようにする。 ・2学期に実施する「心の自己調整力を育むプログラム」の中で、リラクゼーション法や呼吸法、筋弛緩法等を取り上げ、継続的に実施していく。 ・11月の学校保健委員会で、よいねむりが心の健康にも良い効果をもたらすことを児童・保護者に啓発する。	「メディア利用時間と視力低下について」 ・データをとってはいないが、関係がないとは言えない。睡眠と合わせて視力低下についても各家庭と連携していけるとよい。
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとのことを知り、ふるさと愛を育む、ふるさと教育を推進する。	教頭	【努力指標】 地域教材等地域の特色を生かしたふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「地域教材等地域の特色を生かした教育活動を行った」と回答する教師の割合が A：100%以上 B：90%以上 C：80%以上 D：80%未満 【児童アンケート】「生活科・総合や地域の方との学習を通してふるさとが好きだ」と回答する児童の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	【教師】 A 92.9% 【児童】 A 94.1%	・児童のA回答が約7割となっている。教師の地域教材研究、職員間の日常的な情報交換、CSの協力と地域人材の活用により、充実したふるさと教育が実現していることが結果に表れていると考えられる。	・今後も、探究のサイクルが児童の課題意識に基づいて回り、児童が目的と必要感をもって取組む体験活動が展開されるようにしていく。 ・教科で身につけた知識・技能や思考力・判断力・表現力を発揮しながらより確かな定着につながるよう、質の高まりを目指していきたい。	特になし
		【あいさつができる子の育成】 気持ちよい挨拶ができる子を育てる。	清川	【努力指標】 児童が相手意識を持って挨拶をしようとしている。	【児童アンケート・保護者アンケート】 【児童アンケート】「学校で「おはようございます、こんにちは、さようならなど」のあいさつを自分からすることができる。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 【保護者アンケート】「子どもは地域や家庭であいさつをしている。」と肯定的に回答する保護者の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	【児童】 A 95.3% 【保護者】 A 91.7%	・児童、保護者アンケートの結果からどちらもA評価となった。全体の割合が昨年度より1.6ポイント上昇し、95.3%であった。運営委員会の挨拶運動で取り組んだ結果を踏まえての感想を全校放送で伝えたり、生活目標に組み込んで取り組んだり、またその様子を文字や写真にして掲示することで実感できたのではないかと考える。 ・保護者アンケートの結果が前年度と比較すると1.8ポイント低下している。前年度と保護者も違うのでポイントの変動は仕方がないが、親子や地域間で挨拶する機会を設け、挨拶のよさを実感できる施策が必要かもしれない。	・アンケートの数値的には挨拶をしっかりとできる体制は整ってきたように思うが、「自分から」という自発的な行動にはまだ消極的なように感じる。 ・挨拶をすることでどんないいことがあるのか、具体的に全校児童に知ってもらう機会を児童会で設け、取り組みたい。相手意識を向上するために挨拶をされて相手はどんな気持ちになるのか、児童会で実態調査等を行い、結果を児童に返し、自分事として考えてもらう機会を設け、児童の自発的な挨拶が身に付くようにしたい。	